



前橋市 幼児教育センターだより

第82号 令和6年2月発行

「49年の歴史に幕を閉じる宮城幼稚園」



前橋市立宮城幼稚園長 間々田 博

宮城幼稚園は、昭和50年に旧宮城村立の幼稚園として地域の期待を背負って開園しました。平成22年度には園舎も改築され、新しい園舎、芝生の園庭になって14年目を迎えます。開園以来49年間、地域の就学前幼児教育を担ってきましたが、少子化の影響による園児の減少から今年度をもって閉園することとなります。そこで歴代PTA会長を委員とした閉園記念事業実行委員会を組織し、記念事業を企画、実施するとともに閉園準備を進めています。

今年度、年長・年中の2学級、園児数9名です。登園・降園は、保護者送迎となり、登園時、園長が園児一人一人と「おはよう」のあいさつを、降園時には担任が保護者と直接、一日の様子について話をすることができます。職員全員が園児一人一人を見守り、担任を中心としたチームとして個別対応ができる状況です。

園内研修として「個人ポートフォリオを活用した保育記録」に2年前から取り組んできました。写真を使った保育記録（ドキュメンテーション）を集め、日常の保育を「見える化」し、保育者が日々の保育を振り返ったり、園児や保護者が園での活動やそこでの「学び」を共有したりすることを目指しました。これは、少人数園のメリットを生かした実践であり、園内研修の事例検討に活用しています。また、職員や保護者のコメントもドキュメンテーションに加え、修了時には本園での個人ポートフォリオとして園児が持ち帰れるよう作成しています。

また、閉園記念事業として園行事の幾つかを親子体験活動として位置づけました。「親子化石発掘体験」、「親子ダンス教室」、「親子スーパー竹とんぼづくり」、「親子ダイヤ凧づくり」が親子体験活動です。幼児だけでは難しい体験を父母や祖父母といっしょに楽しむことを目的としました。また、「人形劇公演」、「体ほぐし体験」、「パネルシアター公演」、「さよならコンサート」も記念事業として企画、実施しています。その他、地域の方々や卒園児、元職員などに公開した「お別れ見学会」、他園や小学校との交流活動、沿革ビデオ・記念品の作製、消耗品・備品譲渡など多岐にわたって、関係機関と連携しながら、閉園に向けて取り組んでいます。このような閉園記念事業が園児や保護者にとって良い「思い出」、「学び」となるよう願っています。

こども教育研修会から

今年度も多くの先生方に、こども教育研修会に参加していただきました。参加していただいた先生方からたくさんの感想をいただきましたので紹介します。

| | 日・演題・講師 | 参加した先生方の感想 |
|---|---|---|
| 1 | 5月18日(木) 「幼児期から育つ人との関わり ～幼児が学ぶ協同性～」 講師 幼児教育アドバイザー 塩崎 政江 先生 | 人との関わりの根幹が、「自分を肯定してもらうこと」や「認めてもらう」ことであることを改めて再認識することができました。保育者が一人一人を認めていくことで、他人を思いやり協働できるようになるということがわかりました。 |
| 2 | 6月20日(火) 「気になる子どもの理解と支援『この子を理解するとは?』① ～“言葉の認識の違い”から考える～」 講師 D-discovery まつなみ 代表 松波 芳子 先生 | 「知っているはず」と思って、子どもに話したり指示をしたりしていました。「分からないかも」と思って接することが大切であることを学びました。私たちの今の関わりが思春期以降に影響を与えるということが分かり、改めて責任を感じました。 |
| 3 | 7月7日(金) 「幼児の体験を豊かにする環境の構成」 講師 玉川大学教授・東一之江こども園長 田澤 里喜 先生 | 子どもの遊びを面白くするのも、つまらなくするのも関わった保育者次第だと改めて感じました。保育者が答えを出し過ぎず、遊びが展開していけるようなヒントを提示できるよう、自分自身も遊びを楽しみながら保育をしていきたいです。 |
| 4 | 9月27日(水) 「気になる子どもの理解と支援『この子を理解するとは?』② ～この子の“脳のスクリーン”で考える～」 講師 D-discovery まつなみ 代表 松波 芳子 先生 | 気になる子の脳のスクリーンは、感心があること一部に集中し他が見えなくなるということに衝撃を受けました。多数派の見え方だけではなく、少数派の見え方もあるということを常に念頭に置き、伝え方や環境の構成を工夫していこうと思いました。 |
| 5 | 10月18日(水) 「幼児の主体的な遊びのための保育者の関わり」 講師 聖心女子大学 教授 河邊 貴子先生 | 固定的な環境の構成ではなく、教師も楽しみながら展開できる環境の構成をしていく方が、子どもの主体性が育つということが印象的でした。SOAP型記録を実践し、子どもの姿を見取り必要な経験ができるような環境の構成をしていきたいと思いました。 |
| 6 | 11月1日(水) 「気になる子どもの理解と支援『この子を理解するとは?』③ ～穏やかな日常に繋がる“パターン化”から考える～」 講師 D-discovery まつなみ 代表 松波 芳子 先生 | その子のスクリーンで感心があることに焦点を当て、“見える化”をしたり具体的な行動は連続指示をせず、一つ一つ伝えたりすることを、3日・3週間・3ヶ月・3年と、長期間を見据えて支援をしていくことで、その子の強みになることが分かり、根気強く伝えていきたいと思いました。 |
| 7 | 12月8日(金) 「保護者支援のあり方 ～保護者に寄り添い、共に子どもを育むために～」 講師 幼児教育アドバイザー 奥野 みどり 先生(群馬パース大学 教授) | 子どもが一人一人違うように、保護者の背景や考え方も違うので、それを理解して関わっていく事が大切だと感じました。子どもの関わり方に悩んでいる保護者に対して、日々の保育の場面を切り取って、保育士の関わり方を知らせることが大切だと思いました。 |
| 8 | 1月11日(木) 「非認知能力を育む ～日々の保育から考える～」 講師 幼児教育アドバイザー 大島 みずき 先生(群馬大学 准教授) | 非認知能力について分かり易く説明していただけたので、曖昧だった捉えがきちんと理解できました。また、幼児教育がその能力を育てていく上で重要であることも再確認できました。安心した環境で子どもの様々な能力が伸びることを念頭に日々の保育を見守りたいと思います。 |

保幼小連携について《前橋市の取組》

前橋市では、年に2回幼児教育に携わる先生と小学校の先生が共に学ぶ合同研修会と、各地区ブロック（18ブロック）の研修会を行っています。合同研修会では、保幼小の連携について理解を深める内容の講話を聞いたり、地区ブロック研修会では、保育・授業参観や記録映像、事例などをもとにして、10の姿の視点から協議を行ったりしてきました。互いの教育の違いを理解しながら、目指しているものは同じだということに気付いたり、互いの教育・保育から声のかけ方や指導の方法を学んだりし、実りのある研修会となりました。研修会で話題になったこと・参加した先生方の感想の一部をご紹介します。

【園所から】

授業を見て、園所のときよりたくましく成長した姿が見られて嬉しかったです。

子ども同士の話し合いの場をもつことが、学校での様々な場面につながっていることがわかりました。話し合う場面を多く取り入れていきたいです。

園所での学びを小学校の学びにもしっかりとつなげていただけているということが良くわかりました。スタートカリキュラムで丁寧に進めてもらっていることがわかり安心しました。



【小学校から】

保育を見て、園所でこんなにたくさんの方ができると感じました。

子どもが自発的に動けるような声掛けや環境の構成が勉強になりました。ぜひ取り入れていきたいです。

園所での経験が小学校での生活や学習の様々な場面で生きています。園所では、幼児期にふさわしい遊びや生活の中でいろいろな経験をしてきてほしいと思います。



宮城幼稚園お別れ見学会が行われました



11月4日（土）に前橋市立宮城幼稚園のお別れ見学会が行われました。当日は良いお天気のもと、たくさんの方が来園してくださいました。遊戯室には、旧園舎の写真パネルや歴代の幼稚園要覧や文集などの展示、保育室やDENには、沿革史と歴代園長先生、歴代卒園児がまとめられたスライドショーや、記念カードモニュメント、寄せ書きコーナーが設置され、来園した方々が思い思いの場所で思い出話をしたり、記念カードや付箋に宮城幼稚園への思いを書いたりしていました。卒園児も多く見られ、園庭で鬼ごっこをしたり、固定遊具で遊んだりするなど、懐かしさを感じながら楽しく遊ぶ姿が見られ、活気にあふれていました。

皆さんに愛された宮城幼稚園も、令和6年3月31日をもって閉園となります。49年の間、園に関係してくださった全ての皆様、地域の皆様、そして宮城幼稚園、いままでありがとうございました。





「うれしい」「たのしい」「おもしろい」を感じて



「明日もまたよろ！」発表会の本番当日。発表を終え、充実の笑顔満開の年長児から出てきた言葉です。「え？今日が本番だったよね？」と驚く担任。「いいの、いいの。次は〇〇の役やるんだから！」「いいね～」「じゃあ私も違う役やりたい。」

「じゃあ、次はこうやらない？」と、子どもたちの中で、どんどん話が進み、その後もしばらく劇ごっこは続きました。…なぜ続いたのか？きっと、発表会で見てもらったことが嬉しくて、劇を友達と一緒にすることが楽しくて、そしてどんどん面白くなったから。

発表会に向けて、人数に合わせてセリフもお話も皆で苦労して考えました。なりたいたい役になったり、一人二役したり、大道具や背景も考えたり作ったり…ダンスもしたいし、可愛い素敵な衣装も作りたい！皆の前はちょっと恥ずかしいけれど、子どもたちが「やりたい」をたくさん詰め込みました。行事のねらいとしては『学級の友達と協力して、一緒に遊びを進める楽しさを味わうようになる』『劇や合奏などを家の人の前で発表して、音を合わせる楽しさや、友達と気持ちを合わせる楽しさを味わうようになる』『自分でできることや自分の役割をはりきってしようとするようになる』等があります。発表会に向けて、ねらいのように、大きく成長しました。そこで重要なのが、教師主導ではなく、子どもたち自ら「嬉しいと感じて」「楽しんで」「面白がって」きたことなのだと思います。もちろん担任としては想定外で苦笑いしてしまうことも。大変なこと難しいことを協力して乗り越えたり、担任が援助したりすることもありました。自分たちから、そして遊びの中から始まっているからこそ、「劇ごっこ」「楽器の演奏」はずっと魅力を失わず、最後までつながっていたのでしよう。

「またやりたい！」「いいこと思いついた！」「いいね～！」「こうしない？」こんな言葉が子どもたちから出てきたら、心の中でガッツポーズです。担任の意図とは異なる方向へ発展していったとしても、子どもたちがやりたいことを実現できる喜びを感じているのだろうと思うから。保育をする中で、一番の味方として見守り、困難や大変さを受け止め、さりげなく、でもしっかりと支えられたら…と思います。そして、これらを可能にするのは子どもたち同様に、保育者も「面白がる」こと。保育に悩んでいた時、大先輩に頂いた、私の保育の根幹を支えている言葉です。この「面白がる」気持ちがあれば、何でも受け止められるような気がします。

